



【質問者1・大学生（東京）】貴重なお話ありがとうございます。ESDを通じた防災・減災の展開というのが今後非常に大事だということが分かりましたが、これを実践していく教員養成はどのようにしていくかということを知りたいと思って、質問させていただきました。よろしくお願いします。

ショウ ありがとうございます。あと三つ、四つ質問を受けたあと、パネリストの先生方にお聞きしたいと思います。ほかにどなたかいらっしゃいますか。

【質問者2・NPO職員（東京）】貴重なお話どうもありがとうございました。どなたでも結構ですが、グローバル・アクション・プログラムで少し話があったのですが、これを具体的に落としていくとどんなものかを教えていただければ幸いです。以上です。

ショウ ありがとうございます。あと2点ぐらいあれば、一番ありがたいのですが。

【質問者3・高校生（東京）】今日はどうもありがとうございました。今日の話は、防災・減災について教育を通じて子どもたちなどに啓発運動をしていくという話だったと思いますが、今回の震災でもう一つ大きなテーマであった原子力発電の事故については、今までどのような教育をなさっていたのか、何かあればお願いします。

ショウ どうもありがとうございます。では、お願いします。

【質問者4・大学生（東京・仙台出身）】今日はお話ありがとうございます。一つお伺いしたいのが、今回このフォーラムというか、防災・減災の取り組みをされているのが、東日本大震災を中心にいろいろ被害を受けた地域がメインだと思います。これからの日本の将来、持続可能ということを考え、将来、未来に向けてというお話をされている中で、これからいつどこで災害が起きるか分からないと思います。災害が少ない地域、津波などなかなか被害がない地域にどうやって防災教育の必要性を訴えていく必要があるのか、お尋ねしたいと思います。よろしくお願いします。

ショウ どうもありがとうございます。前のほうで一つ手が挙がっていたと思います。

どうぞ。

【質問者5・高校生（仙台）】私の場合は感想になります。私は小学校6年生のときに地震を経験して、それまで1年生からずっと避難訓練をしてきましたが、その間、あまり大きな地震がなくて、地震というものにあまり……、「そこまで大きくもないのでは？」といった考えがあったのですが、経験することによって考えが変わり、私たちのこの経験は、経験しないと分からないこともあるけれど、それをどうやって伝えていくかというのが問題だと思います。先ほどの方が言ったように、災害の少ない地域にどれだけ伝えていくかというのが、経験した私たち宮城県民の課題になると思いました。

ショウ どうもありがとうございます。非常にいい感想です。どうもありがとうございます。それでは次を最後の質問として、このあとはパネリストにお願いしたいと思います。

【質問者6・海外参加者】インドネシアのバンダ・アチェから参りました。防災、ESD、これはユネスコにとっても新しい用語です。そこで提案ですが、インドネシアの被災地、あるいはフィリピン、日本、世界各地の被災地間で一つの連携をつくって、人々にメッセージを配信することにはいかがでしょうか。ユネスコの学校への取り組みも含めて行っていけばと思います。

ショウ ありがとうございます。まず、教員育成の話があったと思うのですが、一つ一つ質問に答えていくというのではなくても、今までの質問に対してパネリストの皆さんからできればお話ししていただきたいのですが、どなたが最初になりますか。グローバル・アクション・プランの実際の導入に関してありましたが、どうでしょうか。

ライヒト 教職員の役割と、グローバル・アクション・プランとの関係について、一言申し上げたいと思います。

先生の役割は、ESDの中で、もちろん重要なものです。さまざまな具体的な行動を、実際教師の側でもとることができると思います。例えば、まず教師の側においてESDの重要な役割を理解し、これを新しい科目というふうに捉えず、むしろESDを現在教えている全ての科目の中に取り込んでいくことが必要です。また、実際今日の休憩前の最初のセッションでのプレゼンテーションにもありましたが、先生も一歩下がって生徒を信頼して生徒に主導権を与えることも、ESDにおいては重要だと。これは一つの具体的な提言として言えるかと思います。教職員に関する優良事例の中で見られたものです。

また、グローバル・アクション・プランの具体例としていろいろ具体的な行動を、私た

ちはいろいろな出版物の中でも提案しています。「Roadmap for Global Action Program」が、愛知の会議のあとで出されました。その中で五つのアクションの分野に関して、さまざまな行動が提案されています。例えば個々の教育機関、個々の学校におけるものとして、これから 2、3 年かけて、ユネスコスクールの一部に対して学校全体を通して全学的なアプローチを奨励する。また、それを支持してほしいと思います。いかにして個々の学校において、ESD を何か特別な科目というふうに捉えるのではなく、むしろ総合的なアプローチを取ってほしいと考えます。

また、キャンパスと共同体、つまり学校と地域社会の関係も重要で、こういったものもユネスコスクールなどで始まっている具体例として申し上げられるかと思います。ありがとうございます。

今村 答えられるところで、よろしいですか。私から三つ答えたいと思います。まず一つは、原子力発電、原子力の、啓発も含めた教育についてです。ご存じのとおり原子力は非常にエネルギーを出す有効なものではありますが、同時にとてもハイリスクです。日本も 50 年くらい前からかなり開発をし、実践しているのですが、当時どういう啓発教育をしていたかと言うと、「本当に素晴らしいものです。一方、危険もあります」と、最初は同じような形で並列して説明されていました。しかし「危険性、万が一になったらとても大変なのでやはり要らない」「いや、必要だ」という中で、どうしても安全神話というのがだんだん出てくるようになりました。特につくる側は、「いや、リスクはあると言っても本当に小さいから。そんなものはわれわれ生きている間にはないから」という形で、それが絶対安全だということが伝わってしまいました。

そういう状況で、万が一津波が来たときに例えば避難訓練をすればいろいろな対応を取りたいけども、そういうことをすると、「いや、皆さん、電力側は安全だと言ったじゃないか。それはうそか」というような形で、対立が進んでしまったかと思います。われわれは今一度、安全性というものと、その利用というものを考えなければいけないと思っています。

二つ目、低頻度のところでどうやって啓発をするのか。経験したならば誰でも分かることですが、経験しないものをどう伝えるかということです。これは本当に難しいのですが、われわれ人間というのはいろいろな状況を見て、知って、想像することができます。想像によって体験に近いものができます。頭の中での理解だけではなく、体を使ったり、実際に動いてみたり、触ってみたり、それによって疑似体験ができる。それが一つ有効なもの

かなと思います。

三つ目、教育養成について。これは見上先生にお答えしていただいたほうがいいと思いますが、私から答えると、教員養成するためには、例えば防災というものはどういう学問なのか。最初に必要なもの、次に必要なもの、また展開すること、そういうものをきちんと整理して、学問として体系化する必要があります。体系化して初めて、先生方に教えていただくような内容ができると思います。それが、実はまだまだ防災というのは皆さんと議論しているところなので、そういうことと教員養成と同時にやっていかないといけないのかなと思います。以上です。

ショウ どうもありがとうございます。トレス先生、どうぞ。

トレス 私からは、高校1年生の方のご質問にお答えしたいと思います。どうしたら経験していない人たちに対して防災教育を行うことができるか。一つは、ストーリーを出版物という形で伝えることができます。例えば先ほどフィリピンで出版されているこの本の話をしました。これは現地語で書かれていて英語に翻訳されたものですが、例えばカナダにおいては、今やこの問題の大きさに鑑み、今このストーリーを広く広めようとしています。経験のない人たちに対しても、こういった本を通じて災害教育を広めようとしています。

ショウ 武田さん、何かコメントがあれば。

武田 私からは2点お答えします。原発で教育は何を教えていたのかというのは、そのまま報道と置き換えれば同じような質問になると思います。先ほど私が申し上げた、震災以前の防災報道の反省は、そのまま原発を巡る報道の反省と同じです。したがって事故が起こったことの批判のみで済むことなく、これからは危険性を踏まえた地域の今後、地域の人たちの命がきちんと守れるかどうか。そういう視点で、提案型できちんと検証していかなければいけないと思います。

もう1点は、世界の被災地間できちんと連携して発信していく必要があるのではないかという質問と、高校1年の方のご質問の被災地ではない人たちにどういうふうに伝えたらいいのかというのは、全く同じようなことだと私は思います。

被災地だから連携しなければいけないということもないですし、被災地じゃないから連携できないということも全然ないということも、まず踏まえる必要があると思います。われわれの発信を待っている人たちが相当数います。私たちの新聞はこの宮城というエリアを中心にしていますが、われわれが先ほど説明した「むすび塾」という取り組みを始める

際に、全国には地元紙が山のようにあります。その地元紙と「むすび塾」を共催する形でわれわれの書くものを地元紙さんと共有して、それをまた住民に伝えていく。こちらから語り部を伴って行って、体験を下にその地域に必要な防災対策を話し合うというようなこともやっています。

それから、先ほどのアチェの方からもあったように、われわれは JICA と連携してアチェで「むすび塾」を開きました。そうすると、被災地間での人々の連携は非常に深まって、「あなたも同じようなつらい思いをしたんだね。であれば、私たちの役目はこの経験をきちんと伝えていかなきゃいけないことだね」と、逆にアチェからこちらの被災地が学ぶような場面もありました。そういう取り組みをやはり地道に続けていくことなのだろうと思います。

宮城県民の課題ではないかというようなご指摘が、高校 1 年生の方からありました。まさにそのとおりだと思います。宮城県民は宮城県民のためにいるわけではなく、これから全国、世界に向けて皆さんが活躍するフィールドが出てくる。その場で自らが経験したことを、隣の人に語り合う。そこからまた 1 人の命が救われるのであれば、そういう活動をつなげていかなければいけないと思います。そういうことの重要性を報道も気付いたし、教育も気付いたし、市民の方々も気付いた。これを忘れないで継続していくことが大切だと思います。

ショウ ありがとうございます。菅原さん、よろしいですか。一言お願いします。

菅原 今、武田さんも言われました。やはりわれわれも、例えば気仙沼のことを今どうやって外に伝えようかということのをいろいろ考えています。一人一人がいろいろなところに呼ばれているいろいろな話をするというのは一番簡単にできることですが、でも、数は限られますよね。だとすれば、今度は今村先生が言ったような話で、発信方法、伝え方を少し考えていく必要があるのかなと思います。疑似体験ということもあるでしょうし、何かのプログラムを作ってそれが伝わるようにするという方法もあるかもしれません。今 3D でも体験できるようになっています。そういった技術を使いながら浸透させるというか、発信をしていくことも大切なのかなと思っています。

ショウ ありがとうございます。角地さんはいかがですか。

角地 災害がない地域というお話がありましたが、そういう地域はないんじゃないかなと思います。いろいろな災害が起こっている。例えばスリランカでは、野生のゾウが襲ってくる。それも一つの災害の中に入れていきます。だから、災害で自分の価値観がどんなも

のとか、全部失ったらどうやって立ち上がるかということは、いろいろな人がいろいろな場面で経験していると思います。それをお互いに語り合っ、お互いにそれを勉強の場にするということは、**DRR** はとても大事な場ではないかなと思います。

ショウ どうもありがとうございます。このような素晴らしいパネラーの皆さんがいらっしゃるし、大勢の方たちもいらっしゃるの、本来ならもう1回実際にやりとりできればなと思っているのですが、時間の関係で、もし、どうしても一つだけ聞きたいという方がいらっしゃれば、一つだけ質問いかがですか。じゃあ、そちらどうぞ。

【質問者7・中学生（仙台）】今日は素晴らしいお話をいただきました。今は防災についての教育に対してのお話でしたが、避難することに関しても、障がい者、身体障がい者はもちろん、脳に障がいがある知的障がいや自閉症、多動症などの人たちをどのように素早く避難させるかということについてはどのような教育をしているのか、お願いします。

ショウ どうもありがとうございます。非常に素晴らしい質問だと思います。この会議の中でも、防災会議の本体会議の中でも、この議論はよくされていると思います。皆さんに聞く時間はないと思いますが、今村先生、何か一言あれば、よろしくをお願いします。

今村 いわゆる支援が必要な方ですね。まず、われわれはどういう方々に支援が具体的にどのように必要なのか。これを理解する必要があります。そういう教育をさせていただく。では、その支援はいつ誰ができるのか。これは大変難しい問題ですが、一つ一つ考えなければいけない。

さらに言うと、要支援者の方は全てリスクはありますが、できるだけ安全なところにおいていただいて、本来避難しないようにしたほうがいいのですね。このような考え方を伝えさせていただいております。よろしいでしょうか。

ショウ ありがとうございます。本当はもうちょっと続けたいという感じですが、時間の関係で。今までの話はなかなかまとめられないという感じですが、3時からずっと皆さんのいろいろな話を聞いて、自分は何が一番耳に残るかということは、皆さんそれぞれの考え方が違うと思います。少なくとも私なりの解釈ですが、まず1点目は今日のメインテーマ、持続可能な発展のための教育、**ESD** と防災教育の共通の点は何か。スライドの中で**ESD** は、防災教育そのままか、防災教育が**ESD** そのままかという話もあったと思いますが、特に一つ非常に重要なのは、日ごろの防災、日ごろの準備、毎日の準備をどうやっていくかということ。特に防災教育の一つが非常に基本的なことだと思います。毎日の準備の中でやったことは、何かあったときにつながっていくことなので、その辺が**ESD** と防

災教育の非常に共通点だと思います。日ごろの準備、毎日の準備を、毎日やっていって体で覚えることが、一つ目です。

二つ目は、今までいくつかパイロット的にいろいろな地域で防災教育、ESDの教育、ユネスコスクールなどはやっておられたと思いますが、これから必要なのは、それを全部の学校、全部の地域で。さっきの話でも、非常に低頻度な地域でどうやって広げていくかということが重要だと思います。これからやっていかなければならない大きなことは、全学校、全地域で防災教育とESDをどのようにやっていくかということが、二つ目だと思います。

もう一つの共通点は、皆さんのお話の中でも出ていたと思いますが、ESDでも防災教育でも、学校の中ではそういう教育ができないですね。学校と地域、地域と家庭をどうやって結び付けていくかということが実践事例からもいくつか出ていたし、階上中学校の子どもたちの発表の中でも出ていました。どうやって学校、地域、家庭を結んでいくか。それもESDと防災教育の共通点ではないかなと思います。

四つ目の言葉は、教育はあくまでも行動に移していくための教育です。もちろん教育でものを知って、いろいろな興味を持って、自分の一つの願望になって、実際はあくまでも行動です。どうやってアクションにつながっていくかということがESDとDRR、防災教育、この二つの進展ではないかなと思います。それ以外、パネリストの皆さん、3時から最初の講演の中でもいっぱいいろいろなキーワードが出ていたと思いますが、皆さんがどんなキーワードを頭の中に残しながら帰るかはお任せします。

英語でプロセスとプロダクトというのがありますが、教育はずっとやっていくという一つプロセスだと思います。だから、これが終わったら全部教育が終わったわけではないのですね。これはずっと行かないといけない。それはESDの場合も、防災教育の場合もそうだと思います。その辺りをみんなで一緒にやっていかないといけないので、学生の皆さん、市民の皆さん、海外から来られている皆さん、みんなでやっていかないといけないと思います。

全然まとめになっていないと思いますが、時間の関係でこの辺りで今日のパネルディスカッションを終了させていただきます。ご清聴、どうもありがとうございました。